

洛友会会報

京都大学電気系専攻内
洛友会
〒615-8510
京都市西京区京都大学桂
075-383-7014
www.rakuyukai.org

ビジネスの構造化の必要性

東京支部長 井上英也 (昭44年卒)



卒業直後に就職先で専門分野を決める段になって、学科の指導教官がおっしゃっていた「何でも良から科学の成果を生かして社会に貢献できる革新的なことをやれ」という言葉を思い出し、応用することに注力した貢献をしようとして決意し事業部門を選択しました。爾来、コンピュータの応用としての公共オンライン・システムの構築、技術革新の激しかった通信分野での設備投資、インターネット技術を活用した電子商取引システムの開発、情報通信シ

システムの企業活動への積極的活用による経営革新、IT事業会社の経営などの活動を経て、とうとう経営コンサルティングの領域にまで足を踏み入れてしまいました。そこで、これまでの経験と乏しい知恵を総動員して、企業は現在の混沌とした状況から一歩でも抜け出して生きながらえるためにどうすべきかについて考えたいという馬鹿な試みをしてみました。その結論は「ビジネスを構造的に捉える」という極めて当たり前のことでした。そして所属する会社のスタッフ(特に武井淳)と共に、それを経営コンサルティングに活用できる形に組み立てることに挑戦しました。以下その意味合いを説明し、具体的な問題事象の解決に適用してみます。

(注) 本稿は、武井淳著「ビジネス構造化経営理論」(ダイヤモンド社刊)に拠るところが大きい。構造を捉えるということは、構造主義のアプローチの真似ごとです。すなわち、組織やシステムの中には表象的には異なる様相を示している、目的や意味という抽象的な面では共通的に存在し、変化しないものがあるということをも前提にしています。

企業経営という側面で事例をもとに議論を尽くしたところ、次のような基本構造が見えてきました。「企業は顧客(最も重要なステークホルダー)の注文を起点にして、それを満たすための製品やサービスを関係者(その他のステークホルダー)と協業しながら調達・提供し、適切な利潤を確保し株主(2番目に重要なステークホルダー)の要請に応える。そしてこの営みを継続させていく。」リーマンショックで判明したことは、基本構造に示す「継続していくこと」がおろそかにされていたことだと断定できます。また、利益追求をしすぎると、顧客はもとより、協業するステークホルダーとの関係が悪化し、注文や調達さらに供給のプロセスで齟齬が生じ、結果として事業が継続していかないこととなります。人間の存在目的のもっとも大切なことが生き続けることであるとしたり、企業も当然そうでなければならぬ

と思います。金融バブルに入れ込んだ(入れ込んでいた)人たちは、人類が存続し続けるために発明した組織をないがしろにしていることにならないでしょうか。

次に、典型的な2つの企業経営課題をビジネスの構造化の視点から分析して、解決の方向を探ってみます。

顧客不在

「開発した新製品を何とか捌かなければならない。急いで購入してくれるお客様を見つけなければ投資が回収できない。商品ごとに責任者を配置して、計画したビジネスプランを早期に達成させること。」

このような会話がビジネスレビューの中で頻発しています。

環境変化の激しい昨今ではこのようなことはどの企業でも起こっていることです。もう少し踏み込んで状況を捉えてみると、製品の機能や性能に関する検討は十分に行われているが、それらの機能や性能が顧客のどのような関心事に適用しているかという分析が十分でないケースが多いようです。顧客に提供する価値の定義がなされていないことが原因です。

最近顧客要求を分析する際に、従来の「デモグラフィカル」なアプローチから「サイコグラフィカル」なアプローチにシフトしている企業が見受けられるようになってきました。このアプローチは「ビジネス構造化」で最も重要な切り口である「顧客価値ケース(顧客に価値を創造して提供するパターン)」を具現化する一手段でもあります。

構造を表現するための2つの重要な切り口である「顧客軸」と「商品軸」を関係付けて、できるだけ論理的に分類するだけで、ビジネスの起点でもあり、終点でもある、すなわち企業にとっての「ビジネス基点」である「企業と顧客の間の営み」を鮮明に把握することができ、製品と顧客要望のアンマッチを縮小することに繋がり、事業計画の達成確率が向上するでしょう。

変革一過性

「経営はリーダーの才覚で決まる。従って後任の社長は、会社(私)の理念だけを十分理解している者が適任だ。組織や経営管理方法は新社長の考えに合わせたものにするればよい。」

このようなコメントが後任社長の人選に関してよく聞かれます。経営の神様と言われた方々が創業した企業も、時代の大きな変局点では後継者不在に悩んでおられます。経営の仕組みを構造的に表現する手法を持ち合わせていないがゆえに、理念と現象(具体的案件)の口頭伝承となっているケースが

多々あります。その結果伝言ゲーム現象が起り、1〜2回の引継ぎを経ると当初とかけ離れた認識が醸成されてしまうことになり、その結果トップ交代があると継続的な企業変革ができなくなり、変革は常に一過性となりがちです。経営の目的や経営者の意思が理念的に唱えられるだけでなく、論理的かつ構造的に表現できれば前任者の意図の継承は効果的であり、リーダーの継承が円滑になるでしょう。さらにステークホルダーは、経営戦略が構造的に理解できるので、異論や新たな意見を具申しやすくなり、結果として経営にダイナミズムと深みが付いてきます。「ビジネス構造化」の考え方を適用すれば、「顧客価値視点」「株主価値視点」そして「長期継続性視点」の三つの視点からの自社経営の調和の取れた論理構造を規定することができます。

電気系エンジニアの経営論は如何だったでしょうか。紙面の都合上言葉尽くせず分かりにくくなってしまうことをお許しください。

ビジネスの構造化を考える上では、既存の経営理論のほか、数学や物理学さらにはモデリング手法などの様々な概念やものの見方を活用しています。実現手段として

の情報処理技術の理解なしには有効な経営改革の打ち手が決定できないことも重要な事実です。

冒頭で申し上げたようにビジネスの基本構造は極めてシンプルです。洛友会老若男女の方々、電気系教室で培った考え方を基盤にして企業経営における様々な活動や実行組織を分析しながら、新しい目的行動を設計していくことに挑戦されてはいかがでしょうか。混沌とした現状から抜け出してより良い生活を導き出すためのリーダーシップを手中にできると思います。

洛友会員各位の知見を介した連携と協働の発展を祈念して筆を置きます。

本部だより

安倍稔先生追悼特集



安倍稔元ISCIE会長追悼文

畏友、安倍稔元会長の ご逝去を悼む

西川 禪一

(公益財団法人応用科学研究所
理事長、京都大学名誉教授)

去る1月19日の朝、電話で安倍稔さんご逝去の一報を受けた時、暫くは信じられないとの思いであった。長い間、ご病気の治療を続けておられるとは聞いていたが、元来は壮健な体質の方だったので、こんなに早く亡くなられるとは夢想だにしていなかったからである。

今年のお正月明けに、大先輩の元会長近藤文治先生ご急逝の報に接した時にも大きな衝撃を受けたが、自分よりも年下の方が亡くなられるのは、別の意味の大きな衝撃である。誠に残念であり、深い寂寥感を禁じ得ない。

安倍さんとは、昭和30年代の初め、お互いに大学院生であった頃からの知己だった。安倍さんは京都大学工学部電気工学教室の学部卒業研究の時から、非線形振動の研究で有名な故林千博先生の研究室に所属されていた。それに対して筆者は大学院修士課程までは別の研究室で過ごし、博士課程から林千博研究室に移ったので、学年

では1年下の安倍さんの方が、研究室では先輩であった。それ故、後輩としていろいろなることを教えていただいた。

中でもアナログコンピュータ(アナコン)については何から何まで教えてもらった。安倍さんの若い頃の最大の業績は、本格的なアナコンを手作りで完成され、いつでも支障なく使えるように、保守管理も完璧にこなされた、という仕事ではなからうか。今日の何でもデジタルという時代には、アナコンと言っても知らない人が多いかもしいない。要するに演算増幅器、同積分器、任意関数発生器などのアナログ電子回路ユニットを組み合わせて、解きたい微分方程式のシミュレーション回路を構成し、回路中の電圧変化を記録して解を求める、そういう原理の装置である。

昭和30年代の初期と言えば、我が国では未だ実用的なデジタルコンピュータが存在していない時代であり、非線形微分方程式の解を精度良く求める道具は、アナコンしか無かったのである。だから当時は産業界の研究開発や製造の現場でもアナコンは貴重な武器であったが、アナコンのメーカとしては日立製作所の系列会社が殆ど独占的に市場を占めていた。後に日立の副社長を務められた三浦武

雄先輩には、当時この分野で随分とご教示に与ったことを想い出す。安倍さんは、博士課程単位修得退学後の1年間、日立製作所中央研究所において三浦さんとともに磁気増幅器式アナコンの研究・開発に従事されたという因縁がある。

トランジスタも未だ殆ど実用に供されていない時代であったから、演算増幅器などの電子回路は全て真空管を使って製作する。だから故障やドリフト発生などのトラブルが頻発するので、当時のアナコンの製作と保守管理は実に根気の要る仕事であった。筆者もそれらの仕事の一端をお手伝いしたが、非線形振動の研究に有難く使わせて頂く時間の方が長かった。アナコン実用化の仕事をやり遂げられた安倍さんに、改めて深い敬意と謝意を表したい。

その後の研究・教育活動のご業績は多岐に亘る。強磁性体ヒステリシス特性のアナログシミュレーションと可飽和リアクトルを含む回路に生じる振動現象の解明、熱伝導現象シミュレータの開発と精密溶接技術への応用、電気自動車用高効率直流複巻電動機の開発、電力用半導体回路などパワーエレクトロニクス分野の研究・開発、移動用ロボットの自律走行制御の実用化など、様々の、そして常に先駆的な業績を挙げられた。

それらの仕事に通底するのは、アナコンの設計・製作・保守管理を通じて若い時代に体得された工学技術の研究・開発に対する信念あるいは哲学であると思う。すなわち大学における研究においても、単に可能性としての成果を提示するのではなく、しっかりと実用に耐え得る成果を世に問うてこそ本物なのだ、という信念を貫かれたのではないだろうか。

教育者としての安陪さんは、学生それぞれの気質・特性を丁寧に把握し、それに見合った指導を心がけられた。スポーツ、特にテニスが得意で、若い頃教室の近くのテニスコートでよく相手をしてもらったが、そういう時にもレベル下の筆者などに気を遣いながら、正確なショットで指導的プレーをしてもらったという想いがある。

安陪さんは性温厚で、いつでもここにこと穏やかに話され、振舞われた。だから彼の怒った顔というのは、ついぞ見たことがない。他界されても、別世界でまた穏やかな日々を楽しまれているのではないか、などと勝手な想像をしている。

長年のご厚誼、ほんとうに有難うございました。 合掌

(2011年2月10日記)

※システム制御情報学会(ISCIE)ならびに著者の同意を得て転載します。

安陪稔先生を偲んで

麻生 武彦

(国立極地研究所名誉教授)

昭42年卒)

京都大学名誉教授安陪稔先生は本年1月お亡くなりになりました。研究室のスタッフとして十余年、先生のご訾咳に接した者として、過ぎにし日々を想い起こしつつ、先生のお姿を偲び、茲に小文を寄せさせていただきます。

安陪先生に初めてお目にかかりしたのは「自動制御用電気機器」という授業で、講師として講義を担当されていました。先生は昭和36年に博士課程を終えられ、助手を経て昭和38年に講師になっておられました。

当時、電子工学科の学生は、弱電は無論のこと、強電科目を含む多くの必修科目が課せられていました。これは、往時の教授の先生方のご卓見とは申せ、学生の身としては大変ではありましたが、講義では、電気系同窓の多くの方がよくご存知のように、先生は終始にこやかに話され、黒板に几帳面にお書きになる文字や図表はたいへん綺麗で、その説明もまた非常に分かりやすく、有難かったことが今でも強く印象に残っております。また、課外では、スポーツマンとお聞き及びしており、阪大戦の折り、テニスコートで白いトレパンで大活躍されて

いたお姿が目につかびます。

先生は、すぐに一般電気工学講座の助教に昇任され、その後、昭和57年には浮田先生の後任の教授として講座を担当されました。その間、先生は一貫して、精密なアナログコンピュータの設計製作とそれを用いた非線形振動、熱伝導等のシミュレーション、高周波インバーターをはじめとした電力用半導体を用いた電力変換と電気機器制御等の研究に従事され、この分野で数多くの先駆的な業績をお挙げになっておりました。とりわけ、安陪先生と申せば「電気自動車」のご研究を想起いたしますが、回生制動などという言葉が一般に使われるようになった当今の電気自動車の隆盛を拝見いたしましたにつけ、先生の卓抜した先見性に思いをいたすこと一入であります。私はマイクログ波の池上研での特研、無線通信の前田研での修士を経て、宇治の電離層研究施設へと、通信分野にて先生とのご縁もなく打ち過ぎましたが、昭和58年、安陪研究室に転任し、先生のご訾咳に接する事となりました。

担わせていただくこととなり、学生時代に受けた強電の講義も有難く、また講義することについて、先生の明解な講義を範として、足許に及ばぬことながら、多くのことを学ばせていただきました。安陪研究室のスタッフは、電気工学実験も担当しましたが、学生へのガイダンスでの先生のお話は、変わらざる懇切丁寧であり、先生が手作りされた多くの実験機器は、まさに回路製作のお手本の感がありました。

安陪研究室は、パワーエレクトロニクスを中心のテーマとしており、私はデジタルコンピュータによるヒステリシスシミュレーションくらいでありお役に立てませんでしたが、先生は常に寛容であられ、メカトロニクス分野のマシンビジョンの延長線上として、オーロラ3次元トモグラフィイ研究等を始めることができました。これらの研究のため当時療原の火のように広がったワークステーションシステムの購入を勧めていただき、大変有難く思いました。KUNINSネットワークシステムの研究室内LANケーブルの敷設では、教授ご自身先頭に立って配線いただき、我々の不器用さを見るに見かねてとは申せ、恐縮の至りでした。この計算機システムにより、大気波動の非線形シミュレーションその他の両分野

融合テーマまで研究させていただき、さらに、博士課程院生を受け入れての海外観測帯同や在外研究員としての外国出張、また、平成7年の改組で講座が電力変換制御工学分野となった折、私は電子通信工学専攻で「知能化計測特論」の講義を担当させていただき、思い起こせばきりのないご支援をいただきました。先生は、研究指導においては厳しいところがあざなりましたが、学生諸君には遍く慕われ、研究室のコンパなども、御酒を召し上がっても終始泰然とされ、笑顔を絶やされることがありませんでした。

先生は、システム制御情報学会やパワーエレクトロニクス学会の会長など要職を勤められました。私は計測制御関連学会の委員としても友人知己も多くはなく、やはりあまりお力添え叶わずじまいでした。斯様に、先生の温顔に浴するばかりで、助教として先生のご専門の分野で十分お役に立てなかつたことを申し訳なく、今に及んでなお忸怩たる思いであります。

安陪先生は平成9年3月に退官され、私もその年に京都を離れまして、その後は大学共同利用機関での多忙に取紛れご無沙汰を重ねるばかりにて、まことに申し訳なく存じております。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

安陪稔先生を偲んで

橋本 岳

(静岡大学准教授 平2年博卒)

本年1月18日(火)に、安陪稔先生が御逝去されました。享年77歳であられました。ここに謹んで、哀悼の意を表する次第です。

昨年12月当初にはお電話にてお元気なお声を伺っておりましたのに、年末に入院されそのまま他界されてしまったのは痛恨の極みであります。とてもお好きだったタバコも、医師である御友人の勧めもあり禁煙されておられたそうですので、こんなに早くお亡くなりになられるとは想像もしておりませんでした。

言うまでもなく先生の御研究の特徴として、卓越した先見性と緻密な計画性、そして熱意ある行動力を挙げられます。アナログ計算機においては時代を先取りした研究を行われ、近年ようやく実用化されてきた電気自動車に関しては、30年以上も前に新型モータを発案・実験されています。また、現在のパワーエレクトロニクス分野において重要素子であるIGBTをその初期より実験に使われたり、移動ロボット研究において検出が容易な照明をメーカーに用いるなど画期的なアイデアを多く発案されています。このように、数々の先見性には目を見張るものがあり

ます。また、先生御自身が一貫して装置・回路を設計され、実験を指導されていたのはとても印象深く記憶しております。

「安陪稔先生退官記念集」には、先生の最終講義が掲載されています。これを読み返しますと、先生が目の前で語っておられるかのように思い出します。この最終講義終了後の質疑応答では、「パワーエレクトロニクスの今後の見通しについて」という質問に対し、「人間が周波数を自由にコントロールできる点が素晴らしい」と回答されたのも、に現場での実験を重視された先生ならではのお言葉だと思います。

先生の研究指導もまさに学生の性質を理解された上での粘り強く、かつ、鋭いものでした。学生自身が自発的に深く研究するように仕向けられ、その結果、本質を深く理解した卒業生を多数輩出されました。また、御講義においても、先生の説明は御自身の人格を表すような丁寧なものであり、まさに今重要とされる「FD活動」を実践しておられました。

安陪先生のエピソードをいくつか挙げさせていただきます。

- ・先生手作りの電気・電子回路の配線はすべてが配線に直角に曲げられた「直角配線」。
- ・テストの採点は原則5点単位。
- ・推薦状等を頼まれると、即座

にその場で書かれていたこと。

・先生は常に居室のドアを開けておられたこと。これは誰もが入りやすいようにという御配慮でした。

・机の上や実験道具を常にきれいに整理整頓されていたこと。

・(先生がお若いとき)地下の実験室で、水の流れるパイプの周りに磁石を巻いた実験を行い、水質改善に関して特許をとれると思っていた。結局、発電所では普通に行っているということを知り残念だったと、国際会議参加の飛行機の中で笑いなから話してくださいましたこと。

安陪先生には公私に渡り大変お世話になりました。数多くの諸先輩方がおられる中で、僭越ながらこの追悼文を書かせて頂いたことは、私にとって名誉なことであり、同時に私自身の人生を振り返り反省することを先生より指示されているような気が致します。安陪先生の資料を探し読み返すたびに、いろいろなことが思い出され、自分の人生の一部と重なって懐かしく、まだまだ最善の努力ができていないことをもどかしく感じます。研究室前の廊下にて長時間先生に御指導を受けたこと、朝先生がコーヒーを淹れられているときに画像計測の研究のことを相談させて頂くと、「それがやりたいのです」と先生に言われたときには最高にうれしかったことも昨日のこ

とのように思い出されます。今後は、先生の御遺志を心に刻み、精進努力して参りたいと存じます。

大震災が発生し、今後、日本が大きく変化していく時、先生ならどのようなビジョンを示されるだろうか、と考えることも多くなりました。また、地方大学で入試のことに携わりますと、工学部の偏差値が下がっていることに変化危機感を持つとともに、原因や対策は何であろうと考えさせられます。先生はいろいろと大学運営にも御尽力されたので、もともとと御意見を伺いたかったというのが本音です。

私事ですが、安陪研究室の卒業生の山本茂広先生(神戸大学)と浦島智先生(富山県立大学)との共著で画像計測の本をこの4月に上梓させて頂くことができました。安陪研究室卒業生として、この本を先生の御生前に見て頂けなかったことが悔やまれてなりません。先生には本音にお世話になりました。誠に有難うございました。どうぞ天国から私たちをお見守りください。

洛友会本部役員会報告

平成23年度役員会は、去る6月25日(土)午後12時30分より、長尾会長、新田5副会長、9支部長(東北支部と九州支部は代理)、本部役員合計19名の出席を得て開催されました。

役員会は、会長の開会挨拶の後、木村幹事長の進行で議題の審議に入りました。平成22年度事業報告と同決算、平成23年度事業計画案並びに予算案が審議承認されました。木村幹事長より可能な場合には総会を東京・関西以外の支部総会と併催する提案がありました。最後に、各支部活動の状況などの報告があり、定刻の午後2時前に終了しました。

事務局 記

洛友会本部総会報告

平成23年度本部総会は6月25日(土)、東京の学士会館において、東京支部総会に引き続いて開催されました。本部、支部会員89名の出席がありました。

最初に長尾会長より、洛友会の意義、東北震災で感じられたこと、大震災における電力・エネルギー・情報の重要性和把握の仕方、それに対する貢献が電気系の分野にいる人の社会的責務であるこ



と、国立国会図書館長としての
 今度の東日本大震災について考
 えておられること、電子書籍を
 何万台か被災地域へ配布し失わ
 れた図書館環境を構築すること、
 大震災のあらゆる情報を学問的
 記録として残すこと、その他電
 力・通信でなすべき多くこの分
 野の人間として何とかして出来
 ることを提案し働きかけるとい
 うご所存や、会員が多角的に社
 会に目を向ける事の大切さなど
 に言及されたご挨拶があり、そ
 の後、木村幹事長の司会で議題
 の審議に入りました。

平成22年度の事業報告ならび
 に収支決算書(表(1)、(2))につ
 いて事務局より説明があり、木
 村幹事長より特別会計の事務委
 託の経緯について補足説明がな
 された後、異議なく承認されま
 した。続いて役員改選の議事を
 挟み、平成23年度の事業計画な
 らびに収支予算案(表(3)、表(4))
 についての説明があり、決算処
 理で事務委託経費(分室)を特
 別会計から本部一般会計に移す
 ことも含めて異議なく承認され
 ました。役員の改選については、
 佐藤亨幹事の退任ならびに小野
 寺秀俊幹事(現学科長)の就任
 が報告されました。その他の報
 告事項としては、本年1月4日
 に逝去された近藤文治名誉会長

に黙祷の後、幹事長から近藤先
 生が昭和27年より約60年の長き
 にわたり洛友会の発展に貢献さ
 れたことや、昨年度から実施さ
 れた先輩と学生との交流会など
 の紹介などの本部報告、学科長
 の小野寺幹事より、電気系教室
 の現況報告があり、来年10月に
 桂キャンパスに工学研究科の残
 りが移転すること、ならびに修
 士・博士一貫教育などの紹介が
 ありました。

推薦会員

(平成23年6月25日承認)
 海老原 祐輔 准教授
 生存圏研究所
 (総合研究大学院大、平11年博)

応用科学研究所

公益財団法人へ移行

昭和27年から平成16年までの
 52年間洛友会の事務局があり、
 5年前まで近藤文治先生が理事
 長をしておられた財団法人応用
 科学研究所が、最近の法人改革
 に対応して、平成23年4月から
 公益財団法人応用科学研究所に
 なりました。この機会に、この
 研究所の歴史も含め少しご紹介
 させていただきます。

この研究所は大正6年
 (1917)に京都帝国大学工学
 部電気工学科の青柳栄司教授が創
 設された青柳研究所を嚆矢として
 います。最初は真空工学の分野を
 中心とした研究から始まり、白熱
 電球の製造技術で世界に先駆けた
 業績を残されました。昭和14年
 に鳥養利三郎教授(後の第13代京
 都大学総長)が引き継がれ、工学
 の広い分野に研究対象を広げら
 れ、現在の応用科学研究所と改称
 されました。特に京都大学の工学
 系の多数の研究者の協力を得て、
 多くの優れた業績を挙げてきまし
 た。第2次世界大戦後、特に産業
 として成熟させられたのが、鉄鋼
 の誘導加熱方式による材料表面の
 強化処理技術、いわゆる高周波焼
 入れであり、現在の一部上場会社
 高周波熱錬(株)もこの研究所か
 ら生まれました。

現在もこれらの技術と、その後
 に開発されたプラズマ窒化処理技
 術を用いて、金属特に鉄鋼材料を
 用いた機械部品の表面強化処理の
 受託加工をする工場を持ち、その
 工場での収益により、本来の研究
 所の研究活動が維持されていま
 す。

現在研究所では主として3つの
 分野の研究が所内で行われていま
 す。第1の柱は、これまでの長い
 歴史を持つ高周波焼入技術とプラ

教室だより

**2010年度
 研究室対抗野球大会閉幕**

昨年5月に開幕した研究室対抗
 野球大会が、4月28日の決勝戦(川
 上研VS佐野研・水内研)をもつ
 て閉幕しました。参加27チームの
 頂点に立ったのは佐野研究室・水
 内研究室合同チームを5-0で
 敗った川上研チームとなりました。
 なお、三位は野田研究室でした。

和田研究室 M2

生駒 圭司 記



優勝した川上研と
 佐野研・水内研合同チーム

ズマ窒化処理技術を含む金属材料
 の表面処理の研究、第2の柱は超
 撥水・超親水性の塗料など界面科
 学に関する研究、第3の柱は超電
 導線材による自動車用モータの開
 発など、超電導応用機器開発の基
 礎研究などです。また企業からの
 委託を受けて、京都大学ほかの大
 学、高専等に所属される多数の研
 究者を共同研究者として、電力や
 情報通信技術など広い分野の研究
 活動が実施されています。これら
 に加えて金属の表面熱処理技術分
 野の調査や、確性試験、技術指導、
 社会人教育、国際会議などを含む
 公益活動と、先ほど述べた受託表
 面処理加工による収益活動を共に
 行う研究所として、この度公益財
 団法人への移行が内閣府によって
 認定されました。創設者の青柳栄
 治先生以来、鳥養利三郎先生の時
 代を経て、電気系の先生方が中心
 になって築かれてきた100年に
 近い歴史のある研究所であり、現
 在西川禪一理事長、木村磐根副理
 事長(ともに昭和30年卒業)が中
 心となって、この研究所を堅実に
 維持するという重い責任と使命感
 を持つて頑張っています。洛友会
 の会員諸氏のご理解とご支援をお
 願い致します。(HPのURL:
<http://www.riaso.jp>)

木村 磐根(洛友会幹事長)

平成23年度懇話会開催のご案内

在校生（学生会員）と卒業生（正会員）の親睦をはかり、在校生に先輩からのメッセージを伝えて激励するために、洛友会と電気系教室との共催で懇話会を毎年開催しています。今年度は左記のように開催されますので、奮ってご参加下さるようご案内いたします。

記

日時：平成23年11月18日（金） 14時30分～19時30分
場所：吉田キャンパス電気総合館大講義室
懇親会：生協吉田食堂（旧教養部）

プログラム（予定）

14時30分～ 開会挨拶

（電気電子工学科科長 小野寺秀俊教授）

14時40分～ 「中国大学風景―北京、大連、ハルピン」

吉川榮和先生（京都大学名誉教授・昭40年卒）

15時30分～ 「スマートグリッドが拓く低炭素社会」

多山洋文氏（エネゲート社長・昭48年卒）

16時20分～ 休憩

16時30分～ 「通信事業のこれから」と「これから」

田中孝司氏（KDDI社長・昭54年卒）

18時00分～ 懇親会（生協吉田食堂1F）

（会費：社会人3,000円、学生無料）

連絡先：電気電子工学科事務室 長谷川 智子

電話：075-1753-5273

FAX：075-1753-5271

Eメール：konwa-kai@kueckyoto-u.ac.jp

会員寄稿

海外水力開発

玖村 深

（平4年卒 関西支部）

関西の電力会社に勤めておるのですが、ひよんなことから海外事業に携わるようになりました。海外電力事業といっても、商社さんや先行する電力・ガスの他社さんに比べるとまだまだ子どものような実績しかないのですが、それでも事業規模の拡大を図っていかうと奮闘しております。既設発電所の買取や火力IPP案件への参画機会にも目を光らせておりますが、そのほかに、水力地点開発にも取り組んでおります。発電資産の持分容量（キロワット）を増やすという点では、水力開発は時間もお金もかかり、ある意味効率が悪いのですが、豊かな包蔵水力がまだまだ未開発となっているアジアの各国での水力発電プロジェクトに電力会社として意義を見出し、案件の発掘の段階から自ら手掛ける自主開発プロジェクトを地道ながら何件か進めております。今回はその中で、ラオスで進めている案件についてご紹介致します。

ラオスには、十数年前に観光旅行で訪れたことがあります。首都

ビエンチャンは、「世界で最も屈な首都」として、旅行者の間では有名なところです。逆に、何にもないのがラオスのいいところだとも云われており、貧乏旅行者が意外と多く集まるところでもあります。実際に行ってみても、本当に何にもないところでした。特に見るものも行くところもなく、メコン川のほとりでビアラオ（ナショナルブランドのビール）を飲むぐらいいしかすることがありませんでした。ただひとつ、メコン川に沈む夕日の情景は、まさに絶景でありました。果たして、久しぶりに訪れたビエンチャンは、やはりまだまだ何も無いところでした。少しずつ近代化も進んでいますが、昔ながらの市場は姿を消しつつあり、ショッピングセンターに置き換えられていつているようです。こぎれいなレストランもでき、外国人客相手に繁盛しています。また、朝には短いながらも交通渋滞まで発生するようになっていきます。穏やかでんびりした国民性は相変わらずではありますが。

そのビエンチャンから北東に百数十キロほど行ったところ、メコン川の支流のナムニアップ川に、出力約二六万キロワットの水力発電所を建設しようという計画を進めております。発電した電力量の約九割をタイへ輸出し、一部を地元のラオスに供給すると、出力やダム高は黒四発電所よりも小規模ですが、日本の急峻な山岳地帯とは異なり比較的ゆるやかな地形であるため、総貯水容量は黒四ダムの十倍超とかなりの規模となる予定です。少々乱暴な云い方をしますと、火力IPP案件はほぼ同一の仕様で繰り返し生産される既製品を選んであてはめるようなものであるのに対し、水力IPP案件は自然由来のリスクが大きく、地点ごとの特性にあったオーダーメイドの一品モノを作るようなイメージです。この自然リスクの存在が、水力IPP案件がまだそれほど多くない（事業化し難い）理由でもあります。

山中での水力開発ですので、今はまだダムサイトには何もなく、土木屋さんが拠点のベースキャンプにはりついで地質調査などを



ナムニアップ川

いる案件です。出力やダム高は黒四発電所よりも小規模ですが、日本の急峻な山岳地帯とは異なり比較的ゆるやかな地形であるため、総貯水容量は黒四ダムの十倍超とかなりの規模となる予定です。少々乱暴な云い方をしますと、火力IPP案件はほぼ同一の仕様で繰り返し生産される既製品を選んであてはめるようなものであるのに対し、水力IPP案件は自然由来のリスクが大きく、地点ごとの特性にあ

施しているところ。そうした活動を見ると、土木屋さんの心身のタフさには感心するものがあります。ベースキャンプといえども、実際はビニールシートで覆っただけの掘っ立て小屋でして、半分野宿のようなものです。その小屋で寝泊りしながら、炎天下で調査を行い、何日かにいちど川床まで降りてゆきナムニアップ川の水で行水をする、という暮らしぶりです。ただ、行水しても、高低差百メートルを超える山道を登って戻らねばならないので、帰ってくる頃には再び汗だくになってしまおうというのが難点のようです。ラオスには十五日まであればビザなしで滞在できますが、調査が長期間に及ぶ場合には、それでは足らなくなってきました。そうした場合には、ふもとの町まで降りてゆき、川を渡っていったんタイへ入国し、リセットをかけてから再びラオスへ入りダムサイトへ戻ってくることにあります。

が不発弾化し、現在も山岳地帯や村落部に多数存在しており、大きな社会問題となつていっているものです。水力開発を行うとなれば、当然のことながら、広範囲にわたり道路を建設し、ベースキャンプやダムを建設し、送電線を建設するわけですから、協力会社さんに安全に工事を行っていただくには、まず不発弾の調査と処理を行うことが必要となるわけです。ラオスにはそうした業務を請け負う企業も何社かあるのですが、ことの経緯を考えると複雑な気分にもなります。

水力発電は再生可能エネルギーのひとつでありますが、大規模ダムの建設を伴うプロジェクトとなれば、周辺環境へ与える影響も大きなものとなります。この点については、いろいろなご意見があるうかとは思いますが、周囲の方に受け入れられるものをどうやって作っていくかが大事であると思っております。ラオスでは、日本のODAで建設されたナムダム第一ダムという事業が有名です。本事業はたしかに周辺環境や景観を一変させた(地図にもダム湖が出現した)わけですが、実際に現地に行ってみますと、今ではすっかり地元の方に愛されているように見受けられます。ダム湖での漁業を生業とする方も多く、市場に行く

は結構な巨大魚もいてびっくりすることもあります。手前味噌ではありますが、黒四ダムもみなさまに愛されている施設ではないかと思えます。我が国がまだまだ途上国であった頃に、世界銀行の融資を受けて黒四プロジェクトが竣工してから幾星霜、こんどは我々がアジアの途上国での水力開発を推進することで少しでもご恩返しができるかと、僭越ながら考えておる次第です。



関係者と拳固めの図
(後列左端が筆者)

久しぶりの小旅行

松本 鏡
(平4年卒 中国支部)



就職してからずっと技術系の仕事をしてきたが、2年前に事務系の職場に配属が変わり、子会社の事業戦略の策定や新サービスの検討等を行っている。これに伴い、今までのことがなかった経済や戦略の勉強をしなければならなくなった。経済学や戦略は、工学とは考え方がまったく異なる。工学では自然がどう振舞うか、そしてそれをどう人間の役に立てられるかを考えるが、経済学では、人間がどう考えるかに焦点が当たる。競合他社がこういう方向に行こうとしているから自社はこうしよう、とか、こんなサービスをしたらこんな人がお金を払うだろう等を常に考えなければならぬ。考え方の定石みたいなものはあるにはあるが、数がたくさんあり、それが必ず適用できるというものでもない。技術系の人間には戸惑うことが多い。

そのような困惑を抱えながら、

むしろに新しい仕事や勉強をしてきたため、なかなか家族旅行には行けなかったが、2年経って経済の考え方にもまあそんなものかと割り切りをするようにもなり、仕事もひと段落したのでゴールデンウィークに1泊旅行に行くことにした。

目的地は九州の水族館、マリンワールド海の中道である。ゴールデンウィーク中は博多どんたくと重なるため渋滞するというのを聞いていたため、朝早く出発する。5歳になった息子を起すのに手間取ったが、車に乗せると機嫌が直った。早朝なので車もスムーズに流れる。九州に入り車の数も多くなった頃、博多IC渋滞20kmの標識を発見。ついに来たかと思えるも手前の古賀ICで降りたため、事なきを得る。一般道でも渋滞でストップするようなことも無く順調に10時前に到着。今回カーナビを導入して初めての遠出であったが、おかげさまで道中ずっと和やかな雰囲気のまま過ごせた。以前は道を間違えたでケンカになることも多かったが、科学技術の発達に感謝である。

水族館に入るとものすごい人の数である。この時期はみんなどんたくに行つて人がいないのではと思つていたがまったく違つた。イルカのショーの開始まで1時間くらいあるが、もう席はほとんど埋

まっつている。ショーが始まるまで水槽を見ようと思っていたが、予定を変更して席に座って待つ。息子がゴソゴソするのでアイスクリームを与えて静かにさせる。その間もどんだん人が増えていき、立ち見の席も一杯になる。そうこうするうち、ショーが始まった。イルカ2匹のペアと、イルカとクジラのペアがそれぞれ芸をする。今まで何回かイルカショーを見たことがあるが、クジラのショーは初めてなのでとても新鮮だった。イルカのペアは揃ってジャンプしたり水の上に乗って泳いだり、シンクロが見事である。イルカとクジラのペアは、イルカの後にクジラが演技をするのであるが、イルカのシャープでキレのある演技の後でクジラの大きくゆったりとした動きを見ると、クジラの一生懸命さがより伝わってきて愛らしく感じる。構成がよく考えられていると感心した。

水族館を出て海浜公園で遊ぶがとにかく広大である。歩き疲れたのか、息子がもう帰るといいうので、早めに宿に行く。夕食まで時間があるので近くの浜辺を散歩する。妻は趣味の貝殻拾いで彼方に行ってしまったので、息子と二人で岩場を歩く。引き潮で水溜りがそこかしこにできており、息子は中のイソギンチャクを棒でつつい

たりして遊んでいる。夢中である。水族館よりよっぽど食いつきがいい。親の期待（水族館でもう少し喜ぶかと思っていた）とは違う形であるが、息子の喜ぶ顔が見られてなによりである。

次の日の帰り道、海の家で陶器まつりをやっていたので、ぶらりと寄ってみた。妻がご主人（ご隠居さんか？）に、こちらで貝殻が拾えるかと聞いてみると、案内してくれるばかりか一緒に歩いて貝殻を拾ってくれるではないか。なんと親切なのだろう。妻とご主人が貝殻を拾っている間、息子と店の中を物色する。するとお店の人がイチゴのジュースを出してくれた。その上、どんぶり鉢一杯のあまおうまで試供品で付けてくれた。あまりにおいしそうなのでイチゴ好きの息子と二人で平らげてしまったら、おかわりまで出してくれた。感激である。つい、お茶碗のほかにイチゴも買ってしまった。妻も貝殻がたくさん拾えてご満悦である。この旅一番の思い出の場所となった。

今回の旅行は、大きな驚きなどはなかったが、思いもしないところなさやかな喜びがちらほらとあるものであった。仕事が忙しい中でもできる範囲で旅行などを行うことが大事だと強く感じた。また機会を見つけてどこかに行きたいと思う。

いまこそエネルギー教育

多田羅 昌嗣
(昭59年卒 四国支部)



私は、卒業後電力会社へ入社し、2年前から縁あって広報の仕事に携わることになりました。それもエネルギー広報という、原子力・火力・水力・新エネルギーも含めたエネルギー全般をお客さまにPRしていく仕事です。一般のお客さまだけではなく、もうひとつ、力を入れているのが、小中高校生までの児童、生徒さんへのエネルギーの基礎知識の教育です。平成14年から社員が各学校を訪問し行なう出前エネルギー授業をスタートさせ、10年目を迎えた現在は、年間600〜800回2万人を超える子供たちへ出前授業を行なっています。

や教材を熱心な先生方と相談しながら制作しているところです。このような理科教育に熱心な先生も一部おられる一方、「教育学部は文系」といった先入観が世間一般的にある一方で、教育学部に進む理系の方が少なく、理系的思考方法をしっかりと教えることが出来る先生が少ない、とも聞いています。実際の息子も、高校1年の終わりに文系を選択した理由を聞いてみると、「理系はどんな職業があるのかイメージがわからない」と言っていました。確かにテレビドラマやマンガを見ても、私の子供の頃とは違い、医者を除けば、刑事・警察、先生、弁護士、料理人、マスコミ、漫才師、銀行員などのように文系に類する仕事人がほとんどです。エンジニアが主人公のテレビ番組なんて、一時期のプロジェクトX位で、民放では見たことないですよ。逆に昭和の時代は、アポロ計画や大型ダム、新型自動車などの開発物語などエンジニアの活躍を目にする機会が多かったですように思います。

で動く仕組みをああでもない、こうでもないと考え、うまく直れば、修理代を儲けた喜びともうひとつ、ものの仕組みを考え、動かない理由を解決した時の快感が、電気工学に進んだ原点のように思います。しかし、明かりを例にすると、白熱電灯と違ってLEDでは明るしくみは見ただけでも、多少分解したところでもわかりません。

そのためか、洛友会での先生方のお話の中で、最近では学生実験の中でもテストの使い方から教えることもあるとおっしゃっていました。またたまに行く四国の電子部品のお店のおやじさんから聞いたこんな実話もあります。「電子工作が説明書どおりに作ったのに動かない中学生の子供と一緒に怒鳴り込んできた母親がいました。私が、どれどれと、その作品を良く見ると、半田付けではなく接着剤で電線をつないでいたんですよ。」すべてがそうではないにせよ、物質的にも経済的にも恵まれた現代では、自分の手を動かさなければならぬのかもしれない。今年3・11の東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所の事故については、大変な被害を出しており、原子力に携わる技術者として私も非常に重く受け止



出身高校での
出前エネルギー授業

めております。被災された方々、とりわけ子供たちが、原子力発電のみならず私たちの培ってきた科学技術自体に嫌悪感さえ感じているのではないかと心配してまいります。

こういった環境の中で、子供たちが科学技術に興味を持って、次世代の様々な選択を正しい知識で行なっていくためにも、私たち現場経験のある技術者が直接子供たちに語りかけ、発電所などの現場で実際に動いているものとその裏で働いている仕組みに興味を持ってもらうことが必要だと感じています。今の自分に何が出来るかと言えば、小中学校に向き、エネルギー教育のカリキュラムの中で、電気や発電の仕組みなどを実験を通じて自分で考えて理解し、面白さを感じてもらおうことです。

このためには、実験がうまく行かない時こそ大事です。なぜなら、現状をよく把握し、自分の予想に対し、なぜうまく行かないかを考え、その理由の推論に基づき対策をとった上で再実験するサイクルの過程がより面白いからです。しかしこれには時間がかかります。今の先生方が大変忙しいこと、また理系の授業に苦手意識がある方が多いことなどで、理科実験や実習などの時間が少なくなるのであります。少しでもそのお手伝いができるようなエネルギー教育の仕組み造りを考えるつもりです。

昨年の9月にNHKで放映されたエネルギー教育に関する番組の中でフランスの持続可能開発担当の官僚の印象に残った言葉があります。これはエネルギーの国民的議論が始まった今こそ、その意味を考へるべき言葉だと感じています。そこでご紹介したいと思います。「エネルギー問題は複雑です。国民教育省の目的は子供たちを未来の市民に育てることです。私たちが育てたいのは責任感があり、論理的で、複雑な選択に対しても知識に基づいて決断を下せる市民なのです。つまり主体性に富んだ社会の一員のことです。そうした市民を育てるためにはエネルギー問題は決して欠かすことができないのです。」

工織大に異動しての 現況報告

小林 和淑

(平3年卒)

電気電子工学科(当時は電気系)に入学してはや四半世紀が過ぎてしまいました。東京大学に異動した2年間を除き、ほぼ20年に渡ってお世話になった京都大学を離れ、2009年より京都工芸繊維大学(以下では工織大もしくは本学)に異動しました。京大出身、特に京都出身の方はご存じかと思いますが、工織大は京大から3kmほど離れた松ヶ崎に位置する国立大学です。私は京都出身ということもあり、高校生ぐらいからはその存在を認識しておりましたが、教授公募の書類提出まで、足を踏み入れたことのない場所でした。工織大の概略を申し上げると次の通りです。もともと、工業系と繊維系のふたつの専門学校(今の高専)が合併して終戦後の1949年に誕生しました。学生数は、学年あたり800名程度と、京大の1/3程度の規模で、私の所属する電子システム工学科は、学部生が60名と京大電気電子工学科の約半分です。同じ左京区に位置する国立大学ですが、大学の規模に加えて、いろいろと違いがあり、いろいろとカルチャーショックがありました。

少し箇条書きにしてみました。

- ・ 休日に食事に行こうとしても、店が開いていない。京大では、日曜日にも生協が開いていたが、百万遍近辺に多数の飲食店があったり、休日の食事に困ることはなかったのですが、周囲が閑静な住宅街ということもあり、特に休日は周辺の店がほとんど閉店してしまいます。ただ、少し歩けば、有名な一乗寺のラーメン店が多数あります。この5月には京大近辺にあった左京区役所が工織大の隣りに移転することもあり、飲食店が増えるのではと期待しています。

- ・ 理系の大学ですが、芸術系の専攻があるおかげか、女子学生比率が高い。昔はそれほど女子学生が多くなかったようですが、現在は学生の1/4が女性です。しかし調べてみると、京大も工学部では1/10程度ですが、全体では女子学生の比率は1/5程度とあまり変わりません。私の学生の頃と比べるとどこも女子学生の比率は増えているようですね。

- ・ 大学名の画数が多い。京大時代は、「京大」とだけ書けば良かったので大変簡単でしたが、大学のフルネームを書こうとすると何倍も画数が70画ほどとなり京大の倍以上です。テレビのクイズ番組では「繊維」が10段階の難易度の9段階目に出てきました。

- ・ 知名度がない。「京都」という地名、「京大」という大学はだれにでも知られるところであり、以前は気にも留めておりませんでした。が、「京都工織大」は全国的には全く知名度がありません。関東の親戚も、国立大学と認識していませんでした。着任早々、軽井沢で行なわれた学会で、大学名をつけた名札を下げて、土産物を買っていると、「アパレル関係の大学ですか?」と店員さんに聞かれてしまいました。また「こうせん」は「高専」と受け取られることもあります。

- ・ 車両通行規制が厳しい。バイクは専用駐輪場、自転車も門近くの駐輪場、車もゲートを設けるなど、車両の通行に関しての規制は大変厳しいです。休日に車で入構しようとする、守衛さんに門を開けてもらわないといけないので面倒です。しかしそのおかげで、自転車/自動車/バイク大洪水の京大と異なり、学内の環境は大変良好です。

- ・ 大学内にノートルダム女子大(ダム女)の校舎が完成した。ダム女の校舎が耐震工事ではばらく使えないための措置ですが、国立大学内に私立大の校舎ができるのは全国で初めてだそうです。数年間後には、建物ごと本学に寄付されます。

- ・ 松ヶ崎駅に近い。何かと交通機関の不便な京大吉田キャンパスですが、工織大は地下鉄松ヶ崎駅

に非常に近いので、出張のさいに何かと便利です。ただし、駅反対側のノートルダム小学校の小学生に配慮したためか、駅の改札口が本学近傍の地上入り口から遠い場所にあるため、改札口まで結構遠いのが難点です。

・英文名と邦文名が一致しない。本学の英文名は「Kyoto Institute of Technology」で、私の所属する電子システム工学科は、「Department of Electronics」です。着任前に調べて、本当かどうか問い合わせをしたほどですが、英文名には文科省の認可が要らないのも不一致の要因の一つのようです。

・夜間コース（先端技術課程）を持つため、7限目まで授業がある。昨年度、私も担当しましたが、7限目が終了すると夜の9時です。裁量労働制のため、もちろん残業手当などはありません。

・洛友会関係者も多い。「京大のもっとも近い国立大学」ということも手伝ってか、本学には尾江先生、若杉先生、吉本先生他の京大電気系出身者、逆に京大には引原先生他の工織大出身者もいらっしやいます。さらに京大現総長の松本先生、工織大現学長の江島先生は、京大電気系の同期生というトリビア的な事実もあります。

・生協の職員の方が名前を覚えてくれる。京大ではそんなことはあ

り得ないと思いますが、職員数が少ないためか、結構顔パスが効きます。徒然なるままにいろいろと書いてみました。着任後、2年あまりが過ぎ、指導する学生数も順調に増えており、昨年は写真の通り、修士2回生1名、修士1回生2名、学部生7名の計10名を指導するに至っております。今後、京大との連携もしながら、専門としている集積回路関係の研究を続けていく所存です。以上乱文、駄文にて失礼しました。



研究室のメンバー
(中央が筆者)

ミュンヘンに滞在して ーことばによる情報伝達ー

岡田 英俊

(昭56年卒)



筆者は、2001年9月から2006年3月まで、ドイツ南部にあるバイエルン州の州都ミュンヘンに滞在しました。ミュンヘン

は、人口約133万人、自動車製造のBMW、機械製造のマン、金融のリアンツ等大企業の本拠地であり、経済的に豊かな地域です。また、市内及び周辺は観光資源にも恵まれ、郊外には湖が点在し、背後にはアルプス山脈がそびえております。年間を通じて、それぞれの時期のスポーツを手軽に楽しむことが出来ます。皆様御存じの有名なお祭りとして、毎年9月末には市の中心で世界最大のビール祭りであるオクトーバーフェストが開かれ、この期間中には500万人以上の観光客がミュンヘンを訪れます。実際、ミュンヘンは、経済的にも文化的にも極めて豊かな街と言えます。ミュンヘンの歴史や現在の観光資源につき

ましては他の文献に譲り、本稿では私がミュンヘンでの日常生活を通じて感じましたことを記します。

私が勤務しておりましたのは、国際熱核融合実験炉チームであり、事務所はミュンヘン郊外のガルヒンクにあるマックス・プランクプラズマ物理研究所の中に置かれておりました。国際チームですので、事務室の形態は各人に個室が用意されており、日本の企業でよく見られるような机を付き合わせた形態とは異なっております。

この個室形式は、雑音に邪魔されず仕事に集中出来ますので歓迎されるといいます。日本人研究者の間では決して評判は良くありませんでした。曰く、「個室形式では、仲間がどのような作業をしているのか把握できず、いちいち仲間の所に行つて聞かなければならないので、業務効率が良くない」、あるいは「日本の様に皆が同じ場所にいると隣の人が何を実施しているのか常に判るので、時間の無駄がない。」等々。周囲の雑音は、「職場」と思えば我慢できる」と言った方もおられました。

これらの日本人研究者の感想は、何を意味しているのでしょうか？ミュンヘンにある企業や研究所の事務所はほとんど個室形式ですが、彼らは非常に効率の悪い仕事をしていますのでしょうか？日本

人研究者の言うように、作業者が机を並べる執務方法は本当に効率が良いのでしょうか？

確かに日本人以外の研究者は普段から個室で作業しておりますが、私が何かを尋ねた折には、彼らは極めて丁寧に説明します。更に、私が彼らに何かを説明する際にも、私の意図と彼らが理解したこととの間に相違がないか、丁寧に確認します。彼らは、必要な情報を交換した後、再度個室に戻り、交換した情報を念頭に置いてそれぞれの作業を進めます。

一方、日本の様に作業者が机を並べる方式では、意図した情報交換の必要性は下がります。極端に申しますと、「おい、あれはどうなっている？」と尋ねれば、「あれ」が何を指しており、「どうなっている？」とは具体的にどのような状態になっていることか御互いに瞬時に理解することが可能になるでしょう。但し、これを可能とするためには、作業者同士は常に机を並べて、相手が何をしているのか常に把握する必要があります。

ここに、私は日本人とミュンヘンの研究者との間の、意思の疎通方法の相違を見出します。ミュンヘンの研究者は、意思の疎通は、それが口頭であれ文章であれ、あくまで言語を通じて行います。一方日本人は、空間と時間とを共有

することにより、即ち同じ時間に同じ物を見ることにより、情報を共有します。この場合、極端に申せば、ほとんどの情報は両者の共有情報であり、一方のみが所有している情報はほとんどありません。「おい、あれはどうなっている？」の一言で情報を伝達しうるのは、その点のみを見るならば効率的と言えませんが、そのためには場所と長い時間を共有する必要があります、果たして本当に効率的かどうか、私は疑問に思います。

ミュンヘンでは、日本人のみの集まりにも参加することがありますが、この集まりにおいても、概して日本人は積極的に情報を交換するよりは、むしろ同一の場所を同一の時刻に共有していることに安心感と満足感とを見出しているように思います。この際の典型的な会話を御紹介しましょう。一人の方が、とある場所が素晴らしくと言いはじめました。そうしますと、他の参加者も「あそこは、いい。」と口々に賛同しました。私は、その場所には行ったことがなかったのですが、そこはどのような場所かと尋ねました。返ってきた答えは、「行ってみればわかるよ。」

ここでは、情報の伝達は全く行われておりません。御互いに、共有している情報を確認したのみです。もし、この会話の相手がミュン

ヘンの方でしたら、答えは全く異なっていたと思います。彼、彼女は、私に実際に行ったことのある場所を尋ね、私の経験した場所の類推からその場所を描写するでしょう。勿論、百聞は一見にしかずと申すとおり、言葉での描写には限界があると思います。重要なことは、言葉で情報を伝達する意思の有無です。

私は、日本式の仲間が机を並べる方式と、ミュンヘンでの個室形式との優劣を論ずる意図はありません。但し、今も昔もそうですが、私はある人と常に同じ場所を長い時間共有することは出来ておりません。現在、予算が厳しくなってきたり、余裕のある人員配置は出来なくなっており、その状態で保つことは、一層難しくなっております。必然的に、私どもは言葉で情報を交換せざるを得ず、情報を言葉で発信する能力、言葉で情報を受け取る能力は、仕事を共同で進めていく上で必須とされてきております。

日本人が、英語があまりうまくないとの話は良く聞きます。私は、統計を取ったことはありませんし、例えば韓国人、中国人の英語能力と厳密に比較したことはありません。但し、私は、「それでは、日本人は日本語ではうまく情報を伝達しうるの

か？」と問いかけたく思います。実際私は、日本語で情報を伝達できない方との共同作業をせざるを得ないことが以前ありましたし、現在も苦慮している案件の一つです。大学の研究室におかれましては、研究室内の打合せ等を通じて、言語による情報伝達能力の訓練により一層力を入れて頂きたく申し上げます、本稿を締めくくらせて頂きます。

同窓会だより

昭和29年卒業同窓会

昭和29年(1954年)卒業生の同窓会は二九稀会(ニクマレ会)と称している。ニクマレ世にはばかりということからつけられたものだが、すでに36%の人が鬼籍に入っている。また病氣入院中や自宅療養中の者も少なからずいる。皆高度成長を支えてきた強者であるが、今年で平均八十歳に到達したのを記念して、5月25日、京都府木野町二条「さつき」の川床で同窓会を行った。

卒業50年記念を嵐山で行って以来7年ぶりに、現存する同期生48名人中ほぼ半数である26人(同伴の夫人2名)が集まった。午後6時から宴ははじまったが、天気



2011年5月25日
二九稀会80歳記念同窓会
於 京都木野町「さつき」

にも恵まれ、遠方から駆けつけた友人や50年ぶりに顔をみせた友人も交えて歓談のひとときを過ごした。杖を手放せない人も何人かいたが、八十の老人?とは思えないほど皆元気であったことは嬉しいことであった。3年後の卒業60周

年での再会を約して、会を閉じた。(文責 平井正)

参加者・安賀、井内、井上(和)、井上(博)、伊藤、市川、片井、北野、北村、桑畑、小林、塩見、島田、染山、田中、高田、中村、野田、平井、星野、間瀬、松村、山崎、山下、山本、渡辺。

支部だより

四国支部総会報告

平成23年5月20日(金)、高松市内の「全日空ホテルクレメント高松」において、第56回洛友会四国支部総会が開催されました。

本部から木村磐根名誉教授、教室から萩原朋道教授にご出席いただき、四国内からは30名の会員が集まりました。

総会は、四宮四国支部長(昭和41年卒)の挨拶で始まり、最近の電気機器の進化と用途の将来像について、GPS付カメラを例にとり、ご自身の経験談とともに興味深いお話がありました。

次に、木村名誉教授から、洛友会の会費納付状況や「先輩と学生との交流会」でのトピックスなど、洛友会の運営改革の取り組みについてお話いただきました。

萩原教授からは、桂キャンパスの

様子について、写真を交えながらご紹介がありました。また、電気系教室の近況、昨年度の就職状況、新しい教育プログラムについて詳しいご説明があり、支部会員は自らの学生時代を思い起こしながら興味深く聞き入っております。



平成23年度洛友会
四国支部総会
平成23年5月20日
於 全日空ホテルクレメント高松

四国支部幹事からは、伊方発電所における地震・津波に対する対応状況紹介の後、平成22年度事業報告、会計報告、平成23年度予算案の説明があり、満場一致で承認されました。

総会終了後、懇親会が富田先輩（昭和23年卒）の乾杯音頭で始まり、先生方や久しぶりの友人と酒を酌み交わしながら歓談しているうちに、あつという間に予定の時間となり、最後に恒例となっている「逍遙歌」と「琵琶湖周航の歌」の大合唱で会を締めくくりました。

その後、有志一同は同ホテル21階のバーにて、高松の夜景を眺めながら深夜まで親交を深めました。
藤野 盛夫（平8年卒）記

関西支部総会報告

平成23年5月22日（日）、ホテル京阪京都において、関西支部総会が60名の参加を得て開催されました。また、総会に先立ち、「パワー半導体炭化珪素（SiC）技術とグリーンイノベーション」と題して講演会を開催しました。講演会では、独立行政法人科学技術振興機構・JSTイノベーションプラザ京都館長の松波弘之京都大学名誉教授（昭37年卒）より、シリコンカーバイドに関する歴史から太陽電池や電気自動車等への応用など最先端の技術動向、将来への展

望にいたるまでわかりやすくお話しただき、電気系教室卒業の我々にとつてたいへん興味深い講演会となりました。

支部総会は尼田総務幹事の司会のもと上田支部長のご挨拶で始まり、井上会計幹事から平成22年度事業報告および決算報告があり、また平成23年度事業計画および予算編成ならびに平成23年度関西支部役員改選について審議され、満場一致で承認されました。

支部長 辻村順一（昭46年卒）
副支部長 丹羽 彰（昭48年卒）
総務幹事 福田 隆（昭57年卒）
会計幹事 米満英二（昭63年卒）
の各氏です。

また、支部総会では、洛友会幹事長の木村先生から洛友会本部の状況についてご報告いただくとともに、電気電子工学科長の小野寺先生から電気系教室の現況について報告していただきました。

総会終了後は引き続き懇親会が開催されました。洛友会会長の長尾先生のご挨拶の後、高木京都大学名誉教授に乾杯のご発声をいただきました。懇親会では産学、世代を超えて様々な話題に花が咲き、懐かしくも新鮮な大変楽しい交流の場となりました。終わりは、関西支部恒例の「洛友会の歌」を全員で斉唱し、最後に副会長の

松重先生より締めのご挨拶をいただきて散会となりました。

井上 欣也（平元年卒） 記



平成23年度洛友会
関西支部総会 懇親会

中国支部総会報告

平成23年5月27日（金）ANAクラウンプラザホテル広島において第58回目となる平成23年度洛友会中国支部総会が開催されました。総会には本部から松重先生、教室から土居先生をお迎えし、中国地方各地から、今年中国支部へ加入された新卒の方を含めた25名の会員のご参加をいただき、盛大な総会となりました。

総会の開会にあたり、昨年度逝去された中国支部会員と東日本大震災で亡くなった方に黙祷をおこないました。その後、松井支部長からご挨拶

をいただいたあと、支部事務局から支部会員異動状況、支部活動状況を報告、会計決算、予算案、支部役員改選案について説明・提案を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。

続いて松重先生から洛友会本部



平成23年度 洛友会中国支部総会
平成23年5月27日
於 ANAクラウンプラザホテル広島

の近況について、また、土居先生から大学の近況について、それぞれお話しいただき、予定どおり全ての議事を終了しました。

総会終了後、記念撮影を行い、昭和28年卒業の池内先輩のご発声により支部恒例の懇親会を開始しました。支部会員の思いつき、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で大いに懇親を深めながら会は進み、昭和30年卒業の秦先輩のご発声で支部懇親会をおひらきとしました。

なお、総会の受付時および懇親会中に東日本大震災の義援金を募り、多くの皆さまのご支援をいただき、日本赤十字社へ送付しました。

平岡 正憲(平10年卒) 記

北海道支部総会報告

去る5月28日(土) 18時30分より札幌すすきのジャスマックホテル「花遊膳」にて平成23年度北海道支部総会を開催した。

今回は北海道支部としては久しぶりの初参加者となる澤井氏(S48卒)を含む8名の参加となった。最初に、中山支部長よりご挨拶ならびに洛友会役員会の報告等をお願いいただいた後、幹事から前年度会計報告、今年度予算案をご説明し、承認いただいた。

この後、中山支部長のご発声により、懇親会に移り恒例に従い近

況報告を中心に話題を進めた。最高齢の西村氏は94歳とのことであり、毎年の事ながらそのお元気なご様子には感嘆するばかりであり、また、澤井氏には北海道へ来られた経緯等を伺った。さらに、大学における最近の電気系学科の状況についても話題となった。

木元 伸一(平元年卒) 記



平成23年度洛友会北海道支部総会
平成23年5月28日
於 ジャスマックホテル

洛友会東北支部総会報告

平成23年6月4日(土)、仙台市内の「ホテルメトロポリタン仙台」で平成23年度東北支部総会が開催されました。本部から鈴木実先生の御出席をいただき、東北支部からは6名が出席しました。

今年、3月11日に発生した東日本大震災により地域として甚大な被害があったことから、一時、総会の開催が危ぶまれましたが、会員の無事が確認され、落ち着いたところで是非集まりたいとのことで開催する運びとなりました。

総会は井上支部長のご挨拶で始まり、続いて議事では、22年度決算報告、23年度予算案について幹事より説明があり、出席者全員の一致で承認されました。続いて鈴木先生より最近の教室の動きなど洛友会本部からのご報告をいただきました。

総会後、恒例の懇親会を行いました。当然のように大震災の当日は皆どのようであったかが話題となり、停電によりテレビが見えないことで、ラジオの音声だけでは津波の被害がこれほどまで大きいことが地元ではリアルタイムには分からなかったこと、自宅の被害状況と数日続いた停電や断水をごのように過ごしたかなど身近なところを話し合いました。また、未

曾有の津波を受けたこれからは想定外になったときのこととも考えた設計の必要性、福島第一原子力の事故を受けてこれから原子力はどうあるべきかなど、大震災にまつわる話題で終始し、大震災の後で、大きく考え方を変えなければいけなくなったことは皆一致したところで予定の時間となりました。最後に記念撮影の後、来年の総会での再会を約して散会となりました。

秋山 康人(昭57年卒) 記



平成23年度洛友会東北支部総会
平成23年6月4日
於 ホテルメトロポリタン仙台

訃報

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

昭12	山本 隆吉	22	・	2	・	8
昭15	吉田 直浩	22	・	10	・	17
昭19	永山 盛敏	23	・	2	・	16
昭19	末田 和	23	・	1	・	24
昭23	今村 晶正	22	・	5	・	16
昭27	富澤 理	23	・	5	・	20
昭28	淵 啓一					
修昭32	森 偉之輔	22	・	12	・	20
昭33	田村 博	22	・	8	・	29
昭37	山下 道也	22	・	12	・	22
昭52	夏秋 行伸	23	・	1		
修昭52	山本幸一郎	21	・	12	・	6
昭58	芝原健太郎	23	・	4	・	22

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

洛友会会報の電子化に際して第63号が欠号であることがわかりました。お持ちの方がおられましたら是非ご一報お願い致します。名簿のインターネット化や会員への電子メールアドレス付与も検討しています。